

建設業 女性が変える

北九州の女性社長、現場踏まえ講座

建設業界で働く女性のための講座「けんちくけんせつ女学校」が始まった。発起人は北九州市の建設会社の女性社長。男性中心の現場で苦心してきた経験から、誰でも活躍できる建設業にしたい、との思いが込められている。

「建設産業は男だけでなく、女だけでもやっていけない。女性を知って男性が知らないことはたくさんあります」

4月23日に開校した「けんちくけんせつ女学校」。最初の授業で校長の籠田淳子さん(53)が、福岡や熊本、山口の建設会社などで働く15人の女性に語りかけた。籠田さんは、住宅などの設計や施工を手がける「有限会社ゼムケンサービス」(北九州市)の社長。この日、出席者は講義やグループワークを通じ、女性ならではの視点を生かす仕事や上司らとのコミュニケーション法について学んだ。

北九州市の工務店の家に生まれた籠田さん。父親は大工で棟梁。家では職人たちと一緒に食卓を囲んだ。現場で働きたいと思うようになり、大学受験で建築学科を志望すると父親は「女が建築なんかやってどうす

オフィスで社員と話す籠田淳子社長(右から2人目) 11月25日、北九州市小倉北区



る。電話番号かお茶くみしかできん」と猛反対。母親が「今からは手に職をもつ時代だから」ととりなし、滋賀県立短期大学(当時)の建築学科へ進学した。

最初に入社した建設会社では女性の制服はスカートしかなかった。会議では女性がお茶を入れ、灰皿を掃除。2年ほどで辞めた。別の建築会社では現場の作業員を監督する「職長」を任されたが、会議があることを

知らされず、その会議を欠席したことで現場の仮設トイレの掃除もさせられた。

その後、1級建築士の試験に合格。実家の建設会社に入った。客の要望を細やかに聞き取って図面に落とす娘の姿を見て、父親は驚いた。「お前がやっていることは建設業じゃなくてサービス業のよう。これから面白くなりそうだな」

1999年に父親が亡くなり、母が立ち上げた有限会社の社長になった。白黒の線に寸法の数字が並ぶ図面にも写真や色を加えて分かりやすくすることや、暮らしぶりを想像して水回りや収納スペースを設計することを徹底した。1人分の

仕事を複数人で行うワークシェアリングも導入。子育て中の女性も採用した。

同社は社員9人のうち、女性が8人。5人が子育て中で時短勤務の社員もいる。業績は5年で4倍に伸びた。2013年に内閣府の「女性のチャレンジ賞」、15年に「女性が輝く先進企業表彰」を受賞した。

17年、籠田さんが国土交通省の職員と、北海道から沖縄まで全国10ほどの都市を訪問。女性技術者たちに出会って意見を交わした。建設現場にできた女性用トイレを「こっちの方がきれい」と使う男性がいたり、トイレ掃除を女性にさせた

「女性が育てて活躍できるようにするための女性が必要ではないか」との思いが募り、女性経営者が女性社員らに教える「女学校」の構想にたどり着いた。

講師はキャリア教育に携わってきた知人も担う。職種別コースや、女性技能者らが登場する教材用動画も用意する予定だ。

籠田さんは「女性の力を生かすことで、老若男女に快適な空間を生み出す建設産業になれば」と話す。講座の開催は全国で可能。問い合わせは事務局のゼムケンサービス(093・931・0301)へ。

女性技術・技能者 目標数に届かず

日本建設業連合会は2014年4月、東日本大震災からの復興や東京五輪に伴う工事などでの人材不足や技能者の高齢化が顕著になっているとし、女性活躍を進めるべきだと訴える要望書を国に提出した。国交省などは同年8月、「もっと女性が活躍できる建設業行動計画」を策定。建設業の女性技術者・技能者を5年以内に10万人から20万人にすることを目標に据えた。

だが、今年2月に発表された労働力調査によると、女性技術者・技能者は約12万人で、目標を大きく下回った。1級建築士などの資格をもつ技術者は増えて2万人となったが、現場で作業をする技能者の数が伸びていないという。同省は今年度中に会議を開き、計画の見直しをする方針だ。(鳥崎周)

「けんちくけんせつ女学校」のグループワークに取り組み参加者 4月23日、福岡市博多区

